

瀬戸内圏研究センター学術講演会の開催にあたって

多田 邦尚（香川大学 瀬戸内圏研究センター センター長）

瀬戸内圏研究センターは地域の発展に貢献するということを主要な任務にしております。香川大学は 5 年ほど前から瀬戸内圏研究を重点的施策に位置づけて、大学の中期目標に沿いながら研究を進めているところでございます。

瀬戸内圏研究センターの地域の課題は、次の 3 本を柱にしております。

- ・農学部の多田教授をリーダーとする海の研究
- ・経済学部の稲田教授をリーダーとする文化・観光
- ・原特任教授をリーダーとする遠隔医療

では、どのような地域貢献をしているのかを紹介させていただきます。

海グループは瀬戸内海におけるノリ生産激減の原因が溶存三態窒素の減少のためであることを明らかにしています。その中でノリの色落ち対策研究を、大学や県、小豆島町、漁連と一緒に進めております。この試験研究の成果に関しましては、テレビや新聞でも報道されておりますので皆様ご存のとおりですが、養殖ノリ網を別網で囲み、ノリ網内海水の栄養管理を行うノリスカートを発案し、これを現場に設置して、ノリの色回復に一定程度の成果を上げております。また、香川大学のマリーンステーションが中心になって、志度湾のカキ大量斃死（へいし）対策と言うことで、カキ筏に貝リングル（二枚貝の殻の動きを遠隔測定する生体センサー）を設置してカキの健康管理を行っており、カキ業者から強い関心を持っていただいているところです。

次に、文化・観光グループでは離島の過疎化問題に対する調査・研究を行っています。その成果として、「外部からの大きな経済投資という開発では島が翻弄されてしまって、開発されたシステムがなかなか存続しない。そこで、島にある観光資源を島の中で開発して存続させることが望ましい。すなわち、島の生活を尊重して、島の素材を生かして、それを興す人達と島民とが一緒になって交流し、経済を発展させることが大事である」と言う提言をまとめたところです。その他に、瀬戸内芸術祭に関する島民意識調査のまとめ、四国遍路の世界遺産に向けての学術的調査や島めぐり遺跡観光ツアーの発掘なども行っております。

医療グループでは原先生の努力が実って、県と一体となり推進する香川医療福祉総合特区を国に認定させることができました。このこともノリスカートと同じようにメディアを通して皆様よくご存じかと思えます。この総合特区の今後の展開には、諸事項の規制緩和等が必要であり、例えばオリーブナース（離島・へき地などの遠隔医療にたずさわる看護師）の育成など様々なハードルを越えながら、島や山間部への遠隔医療の早期実現を果たして行くための努力がなされている最中です。

瀬戸内圏研究センターでは、このような地域貢献の実績が上がってきておりますけれど

も、これをさらに発展させるためには、外部からいろいろな知識を得る必要があります。そこで、センターの活動を一般の方々にも知っていただくという意味も含めて、この学術講演会を設定させていただきました。

今回は沖縄諸島の発展、内海・内湾の資源政策、遠隔医療分野の最前線で活躍されている研究者の先生方をお招きしております。興味ある話が聞けるといいますので楽しみにしてください。